

〔原 著〕

グループホーム入居中の認知症高齢者における 心理的ニーズと肯定的主観の特徴

三浦 美環¹⁾、大津 美香²⁾、菊池由紀子³⁾、鈴木富美子⁴⁾、成田 秀貴²⁾

要 旨

本研究では、認知症の人が自分らしく暮らし続ける援助方法を検討するため、グループホームに入居中の認知症高齢者の心理的ニーズと肯定的な主観の特徴を明らかにすることを目的とした。グループホームに入居する認知症高齢者8名に個別に半構造化インタビューを行い質的帰納的に分析した。心理的ニーズは【余暇活動】【食事】【人とのかかわり】【信仰・宗教活動】【自分のペースで何かをしたい】【やりたいことはない】【明瞭なニーズを示さない】【ニーズの充足を断念する】の категорияが得られた。生活の楽しみ、趣味、生活の満足感等の肯定的な主観については【人とのかかわり】【余暇活動】【信仰・宗教活動】【食べること】【家事】【施設の生活に満足】【仕事や役割】【過去を回想】【過去の仕事や家事】の категорияが得られ、内容に共通性・類似性がみられた。また、心理的ニーズと肯定的な主観の内容についても内容に共通性・類似性がみられた。【食事】は生活の満足、生活の楽しみの内容と類似し、【人とのかかわり】は、生きがい、生活の楽しみ、幸福、生活の満足の内容、【余暇活動】は生きがい、趣味、生活の楽しみ、幸福の内容、【信仰・宗教活動】のニーズは、生きがい、趣味、生活の楽しみ、幸福、役割の内容と合致した。これらのことから、心理的ニーズの充足が肯定的感情を引き出すことが予測され、生活の楽しみや趣味等を手掛かりとしてニーズの予測が可能と考えた。

キーワード：認知症高齢者、心理的ニーズ、肯定的な主観、グループホーム

I. はじめに

わが国では高齢化が進み、厚生労働省によると2025年には、65歳以上の認知症高齢者数は3,657万人となり、5人に1人の割合で認知症が発症すると予測されている¹⁾。わが国の認知症施策である認知症施策推進大綱²⁾では、認知症当事者や家族の視点が重視され、当事者の視点からニーズを把握することの必要性が示されている。認知症高齢者が自分らしく暮らし続けることができる社会を実現するために、当事者のニーズや思いを把握することは重要であるとする。認知症高齢者のニーズに関する先行研究は少ないが、介護老人保健施設に入所中の認知症高齢者にインタビュー調査を行った研究では、「人とつながってみたい」「自分の生活の仕方・ペースを保ちたい」「自分で何かやりたい」「健康を保ちたい」「周囲の

人にはこのように自分と接して欲しい」等のニーズの特徴³⁾が明らかになっている。「自分の生活の仕方・ペースを保ちたい」というニーズが抽出された背景には、対象施設の入所者数が80名であり、多床室も多くプライバシーが保たれにくいことが影響していると考えられた。一方、認知症対応型共同生活介護（グループホーム）は認知症を対象にした専門的なケアを提供するサービスである。可能な限り自立した日常生活を送ることができるよう、家庭的な環境のもとで、サービスを受けられ、1つの共同生活住居に少人数の認知症高齢者が、介護スタッフとともに共同生活を送る施設⁴⁾である。認知症高齢者にとっては、馴染みのある入居者やスタッフと生活を共にすることで安心して落ち着いた環境で過ごしていることが推察された。しかし、グループホームに入居中の認知症高齢者を対象とした、ニーズに焦点を当てた

1) 弘前医療福祉大学保健学部 看護学科（〒036-8102 青森県弘前市小比内3丁目18-1）

2) 弘前大学大学院保健学研究科（〒036-8203 青森県弘前市本町66-1）

3) 社会福祉法人 沢朋会 白寿園駅前館（〒036-8125 青森県弘前市大字大沢字稲元1-13）

4) 社会福祉法人 沢朋会 グループホーム白寿の家（〒036-8124 青森県弘前市大字石川字岸田152-2）

研究は見当らない。

認知症が進行すると、見当識障害や生活障害から生じる焦燥感や不安感から、認知症の行動・心理症状 (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia: BPSD) が出現し⁵⁾、徘徊から興奮や攻撃的行動が引き起こされ、夜間不眠になってしまう等、QOLの著しい低下を招くこともある。そのため、肯定的な主観を持つことは感情や感覚を前向きにするといわれ⁶⁾、認知症高齢者の肯定的な主観を引き出すことはQOL向上のために重要であると考えた。

肯定的な主観には、生きがい感、生活の満足・充実感、幸福感等がある⁷⁾が、認知症の人の肯定的な主観の内容を調査した研究はほとんどない。BPSDの出現を予防するための介入研究⁸⁾では、副次的に肯定的感情が表出されたが、個々の当事者の肯定的な主観の特徴を明らかにした研究は見当たらない。

以上より、①認知症高齢者は現在の暮らしに満足しているのか。②現在の暮らしに満足している認知症高齢者の心理的ニーズと肯定的な主観の特徴はどのようなものであるのか。③認知症高齢者の心理的ニーズと肯定的な主観にはどのような関連があるのかを明らかにしたいと考えた。

II. 研究目的

認知症高齢者が自分らしく暮らし続ける援助方法を検討するため、グループホームに入居中の認知症高齢者は現在の暮らしに満足しているのか、認知症の当事者から見た心理的ニーズと肯定的な主観の特徴や関連性について明らかにする。

【用語の操作的定義】

1. 心理的ニーズ

Virginia A. Hendersonは看護の基本となるものとして14項目のニーズを挙げている⁹⁾。そのうち「他者とのコミュニケーションをもち、情動、欲求、恐怖、意見を表現する」というニーズは対象者の心理面を表現するニーズであると捉えられた。本研究ではグループホームでの生活における個々の欲求や希望に関するニーズを基に認知症の人が自分らしく暮らし続けるための援助方法を検討することから、心理的ニーズとは「認知症高齢者の表現する個々の欲求や希望」とした。

2. 肯定的な主観

満足感や充実感を持つことは気持ちが前向きになれる¹⁰⁾とされ、生活の楽しみ、趣味、生活の満足感、健康感、生きがい、役割、幸福感などを持つことは肯定的な感情・感覚をもたらす¹⁰⁾⁻¹²⁾とされている。また、肯定

的な主観を積極的に引き出すことにより、認知症の人の意思疎通はより長く維持され、QOLの向上につながる¹³⁾とされる。よって、本研究では肯定的な主観を「QOLの向上につながる認知症高齢者が前向きになる感情・感覚」とした。

III. 方法と対象

1. 対象者

対象者はAグループホームに入居中の65歳以上の認知症高齢者とした。選定基準は①認知症の診断を受けていること、②言語的コミュニケーションによる意思疎通が可能であること、③身体疾患の急性症状はないこととし、8名が対象となった。

2. 調査方法・内容

研究者2名がインタビューガイドに沿って個別に約30分間の半構造化インタビューを行った。面接場所は落ち着いた話ができて、プライバシーが確保できるよう個室とした。研究者と対象者は初対面となるため、施設管理者に導入を依頼した。インタビューでは本音で話せるよう施設管理者には退出していただいた。緊張がほぐれるよう自己紹介や雑談から始め、対象者のペースで会話を進めるようにした。面接中は、対象者の反応を見ながら行った。聞き取りにくかった言葉に関しては研究者2名で確認し合いながら行い、データの信頼性を確保した。

調査内容は先行研究¹⁰⁾⁻¹²⁾を基に設定した。心理的ニーズについては「ここの生活でやりたいこと、希望したいことはありますか」、肯定的な主観については、①生活の楽しみ「ここでの生活で楽しみなことは何ですか」、②趣味「趣味は何ですか」、③生活の満足感「ここでの生活に満足していますか」、満足している場合「満足していることは何ですか」、④健康感「どちらかといえば健康なほうですか」、⑤生きがい「生きがいとしていることは何ですか」、⑥役割「ここでの役割は何ですか」、⑦幸福感「幸せに過ごせていますか」、幸福な場合「何を幸せと感じますか」と質問した。会話中は負担感を与えないよう長時間にならないよう配慮した。また、受持ちスタッフから認知症高齢者の年齢、性別、職歴、入居期間、認知症の種類(診断名)、認知症の重症度(認知症高齢者の日常生活自立度)、BPSDの有無と種類(妄想、徘徊、幻覚、暴言暴力、不潔行動、興奮、異食、抑うつから選択)、要介護度、歩行状態(自立、手引き歩行、シルバーカー使用、杖歩行、車椅子から選択)、既往疾患、親しい友人の有無について情報を得た。

データ収集は2020年3月5日、3月10日に実施した。

3. 分析方法

対象者の基本属性については単純集計を行った。インタビューから収集したデータについては逐語録を作成し、繰り返し内容の確認を行い、文字データに含まれる情報の意味内容を損なわないようサブカテゴリーとし、意味内容の類似性を検討してカテゴリー化し質的帰納的に分析を行った。結果の解釈については、インタビュー直後に調査者2名が施設管理者2名とともに発言内容の確認を行い、老年看護学及び認知症看護の研究者3名（うち調査者2名を含む）が上述の手続きにて分析を行った後、さらに、共同研究者である施設管理者2名とともに分析結果の確認を行い、内的妥当性を高めるよう努めた。心理的ニーズの特徴については、自己実現理論を提唱したマズローの基本的欲求¹⁴⁾と比較した。心理的ニーズと肯定的な主観の特徴を明らかにした結果を基に、心理的ニーズと肯定的な主観の関連について分析した。

4. 倫理的配慮

施設長に本研究の目的および方法について、口頭および文書にて説明を行い、許可を得た後、施設長から施設管理者に対象者の選定を依頼し、依頼を受けた管理者が同意し対象者を選定した。その後、認知症高齢者とその家族に対して本研究の目的、方法、参加の任意性、データの取り扱い、保存期間等について、口頭および文書を用いて説明を行い、参加同意を得て対象者と家族に同意書に署名をいただいた。インタビューでは、録音の同意を得たうえで、ICレコーダーを使用した。対象者に負担感を与えないよう自由時間帯に実施し、対象者のペースでインタビューを行った。弘前大学大学院保健学研究科倫理委員会から承認を得て実施した（整理番号：2019-045）。

IV. 結果

1. 対象者の概要

対象者の概要を表1に示す。平均年齢は、 81.4 ± 8.1 歳、全員が女性でアルツハイマー型認知症であった。認知症の重症度（認知症高齢者の日常生活自立度）は「Ⅱb」3名（37.5%）、「Ⅲa」5名（62.5%）、介護区分は「要介護2」3名（37.5%）、「要介護1」5名（62.5%）であり、歩行は補助具の使用を含めて7名が自立し、1名が手引き歩行であった。入居期間は 2.5 ± 0.5 年、親しい友人が全員にあり、施設での生活環境に適応できている段階にあると思われた。既往疾患は脳梗塞、高血圧症、心室性期外収縮、大腿骨骨折などであり、複数を併せ持つケースもあった。6氏はうつ病の既往症があった。

2. 分析結果

カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉と表記した。個別インタビューに要した時間は31分～35分間（平均32.9分間）であった。

(1) グループホームへ入居中の認知症高齢者の心理的ニーズ

認知症高齢者の心理的ニーズを表2に示す。31の語りの内容から12のサブカテゴリーが生成され、8のカテゴリー【余暇活動】【食事】【人とのかかわり】【信仰・宗教活動】【自分のペースで何かをしたい】【やりたいことはない】【明瞭なニーズを示さない】【ニーズの充足を断念する】が抽出された。心理的ニーズの特徴について、マズローの基本的欲求¹⁴⁾と比較した結果を表3に示す。【余暇活動】【信仰・宗教活動】というニーズは自己実現の欲求、【自分のペースで何かをしたい】というニーズは自己実現の欲求、承認の欲求、【人とのかかわり】と

表1 対象者の概要

対象	年齢	職歴	入居期間	認知症の重症度	BPSD	要介護度	歩行状態
1	70代	農業	3年	Ⅱb	なし	要介護1	独歩
2	80代	農業	3年	Ⅱb	なし	要介護2	独歩
3	60代	清掃業	3年	Ⅲa	抑うつ	要介護1	独歩
4	70代	飲食業 保険勧誘	3年	Ⅲa	なし	要介護2	シルバーカー 自立
5	80代	農業	3年	Ⅲa	なし	要介護1	シルバーカー 自立
6	70代	仕出し屋	2年	Ⅱb	なし	要介護1	独歩
7	90代	農業 主婦	2年	Ⅲa	なし	要介護2	手引き歩行
8	90代	主婦	2年	Ⅲa	なし	要介護1	杖歩行

表2 認知症高齢者の心理的ニーズ

カテゴリー	サブカテゴリー	語りの内容例
余暇活動	過去の趣味や仕事を続けたい	絵を描いてみたい。絵は私でも出来るかなと思う。[昔] 色鉛筆塗で絵を描いた。 家にいれば何でも [道具や材料] 自分があるからさ。ここだば何もないからさ、材料あれば刺繍・裁縫をやりたい。
	テレビを見たい	家では暇があったらテレビを見たり。ドラマとかワイドショーもたまに見るな。
食事	リンゴを食べたい	食べたい物はりんごかな。赤いりんご。(笑顔)
人とかかわり	人とかかわりを持ちたい	夫と [お花見に] 行きたい。(笑顔)
		今、この生活は良いと思っている。[でも] 実家に行きたいなあって思う。施設にいる兄に妹と会いに行ったら喜んだ。
信仰・宗教活動	信仰・宗教活動を行いたい	宗教の主任今もやって。次の人やる人いないから。こういう施設にいればやることできないし出ても行かないし。
自分のペースで何かをしたい	自分のペースで何かをしたい	右足は手術していて、あんまり無理できないけど、お願いされるとみんながやってることをやろうかと思っている。(笑顔)
		体が自由にいかないし、重い物を持てなくなった。やれる範囲で続けられればいい。
やりたいことはない	自発的に行動したくない	なんもやりたくないな、今は。億劫とかではないが。自分の役割がもう終わったみたいな感じ。
		これを続けたいとかはないね。適当にやってる。そのまんまです。若い頃からそんな感じですよ。(笑顔)
	現状に満足し、やりたいことはない	ここで世話になってるから、今の生活に満足してやりたいってことも別にない。みんな [スタッフ] が優しくて毎日ありがたいと思っている。(笑顔)
明瞭なニーズを示さない	何をしたらよいかわからない	何をやればいいのかわからないな。(笑顔)
		何やりたいのか。年取ってるからアハハ。若い時だったらやりたいなあと思う。
ニーズの充足を断念する	やりたいことがあったとしてもやれない	何やればいいって。ただここにいた。やりたいと思っても自分の家でないし。(笑)
	ニーズがあったとしても言えない	今ここにいてるだけ。うちに帰れば若い人は若い人でやるからさ。自分で自分のものやれるんだばいいけどな。若い人のお世話になんねばまね。
	やりたいことがあっても言いたくない	食わせるものを食べるだけ。食べたい時もあるけど、他人さだばしゃべられねえもん。(笑) 家の人だったら言えるけど、他の人なら言えないなあ。(笑)
		やってみたいと思う時もあるけど、めったにないな。あっても言いたくないし。

[] : 文章の意味がつながるように言葉を補足した部分

() : 対象者の表情や笑い声

表3 マズローの基本的欲求との比較結果

マズローの基本的欲求	本研究の認知症高齢者の心理的ニーズ
自己実現の欲求	余暇活動
	信仰・宗教活動
自己実現の欲求、承認の欲求	自分のペースで何かをしたい
所属と愛の欲求	人とかかわり
安全と愛の欲求	—
生理的欲求	食事

いうニーズは所属と愛の欲求に合致した。

(2) グループホームへ入居中の認知症高齢者の肯定的な主観

認知症高齢者の肯定的な主観について図1に示した。

①生活の楽しみ

20の語りの内容から12のサブカテゴリーが生成され、〈人とかかわり〉〈孫やひ孫〉から【人とかかわり】、〈花を見たり育てたりしたい〉〈塗り絵〉〈歌〉〈昼寝〉〈外出〉から【余暇活動】、〈食事〉〈おやつ〉から【食べること】と、【仕事や役割】【宗教・信仰】【わからない】の合計6のカテゴリーが抽出された。【わからない】は1名であった。

②趣味

11の語りの内容から8のサブカテゴリーが生成され、【信仰・宗教活動】、〈塗り絵〉〈編み物〉〈テレビ鑑賞〉から【余暇活動】、〈刺繍・裁縫をやりたいが道具がない〉〈屋外で体を動かすこと〉〈夫との外出〉から【実現困難な趣味がある】と、【趣味がない】の合計4のカテゴリーが抽出された。

③生きがい

12の語りの内容から7のサブカテゴリーが生成され、〈過去の仕事〉〈家事〉から【過去の仕事や家事】、〈家族〉〈人とかかわり〉から【人とかかわり】と、【余暇活動】【宗教・信仰】【生きがいはない】の合計5のカテゴリーが抽出された。

④役割

18の語りの内容から7のサブカテゴリーが生成され、〈食事の準備〉〈掃除や洗濯〉から【家事】、〈宗教主任〉〈宗教活動〉から【信仰宗教】、〈依頼されれば掃除や洗濯に関する役割を務める〉〈若者に任せて役割を持たない〉〈役割を持ちたくない〉から【特定の役割を持っていない】の合計3のカテゴリーが抽出された。

⑤幸福とその内容

20の語りの内容から9のサブカテゴリーが生成され、〈人とかかわり〉〈施設での生活〉〈孫とひ孫の存在〉〈信仰〉から【現在の生活を幸せと感じる】、〈家族との思い出〉〈趣味や遊びの思い出〉〈仕事や役割の回想〉から【過去を回想し幸せと感じる】、〈幸せなのかわからない〉〈幸せとはいえない〉から【幸せか判断がつかない】の合計3のカテゴリーが抽出された。

⑥生活の満足とその内容

20の語りの内容から4のサブカテゴリーが生成され、

〈現在の生活に満足している〉〈食事に満足している〉〈職員や入居者に満足している〉から【施設の生活に満足している】と【自宅との違いに満足できていないことがある】の2のカテゴリーが抽出された。8名中7名が【施設の生活に満足している】と語った。

⑦健康感

10の語りの内容から4のサブカテゴリーが生成され、〈健康〉〈調子は悪くない〉〈加齢変化や病気やケガはあるがまあ健康〉から【健康・まあ健康】と、【認知機能低下の自覚】の2のカテゴリーが抽出された。健康感は全員が【健康・まあ健康】と語った。

以上の①～⑦の結果から、肯定的な主観の各項目から得られたカテゴリーは【人とかかわり】【余暇活動】【信仰・宗教活動】【食べること】【家事】【施設の生活に満足】【仕事や役割】【過去を回想】【過去の仕事や家事】の9カテゴリーであった。

(3) グループホームへ入居中の認知症高齢者の心理的ニーズと肯定的主観の関連

心理的ニーズは【余暇活動】【食事】【人とかかわり】【信仰・宗教活動】【自分のペースで何かをしたい】【やりたいことはない】【明瞭なニーズは示さない】【ニーズの充足を断念する】の8カテゴリーが得られた。肯定的な主観では、各項目の中で関連性があり【人とかかわり】【余暇活動】【信仰・宗教活動】【食べること】【家事】【施設の生活に満足】【仕事や役割】【過去を回想】【過去の仕事や家事】の9カテゴリーが得られた。心理的ニーズと肯定的な主観の内容についても、【余暇活動】は生きがい、趣味、生活の楽しみ、幸福の内容と一致し、【食事】は生活の満足と生活の楽しみの【食べること】と一致した。【人とかかわり】は、生きがい、生活の楽しみ、幸福、生活の満足と一致し、【信仰・宗教活動】は、生きがい、趣味、生活の楽しみ、幸福、役割の内容と一致した。心理的ニーズと肯定的主観についても関連性がみられた。

V. 考察

1. グループホームへ入居中の認知症高齢者の心理的ニーズの特徴

本研究の対象者の語りから、【余暇活動】【食事】【人とかかわり】【信仰・宗教活動】【自分のペースで何かをしたい】のニーズが抽出された。【人とかかわり】を持ちたい、【信仰・宗教活動】を行いたいというニーズは、ヴァージニア・ヘンダーソンは基本的看護ケアにおいて、患者には他者とのコミュニケーションをもち、情動、欲求、恐怖、意見などを表現するニーズや自分の信仰に

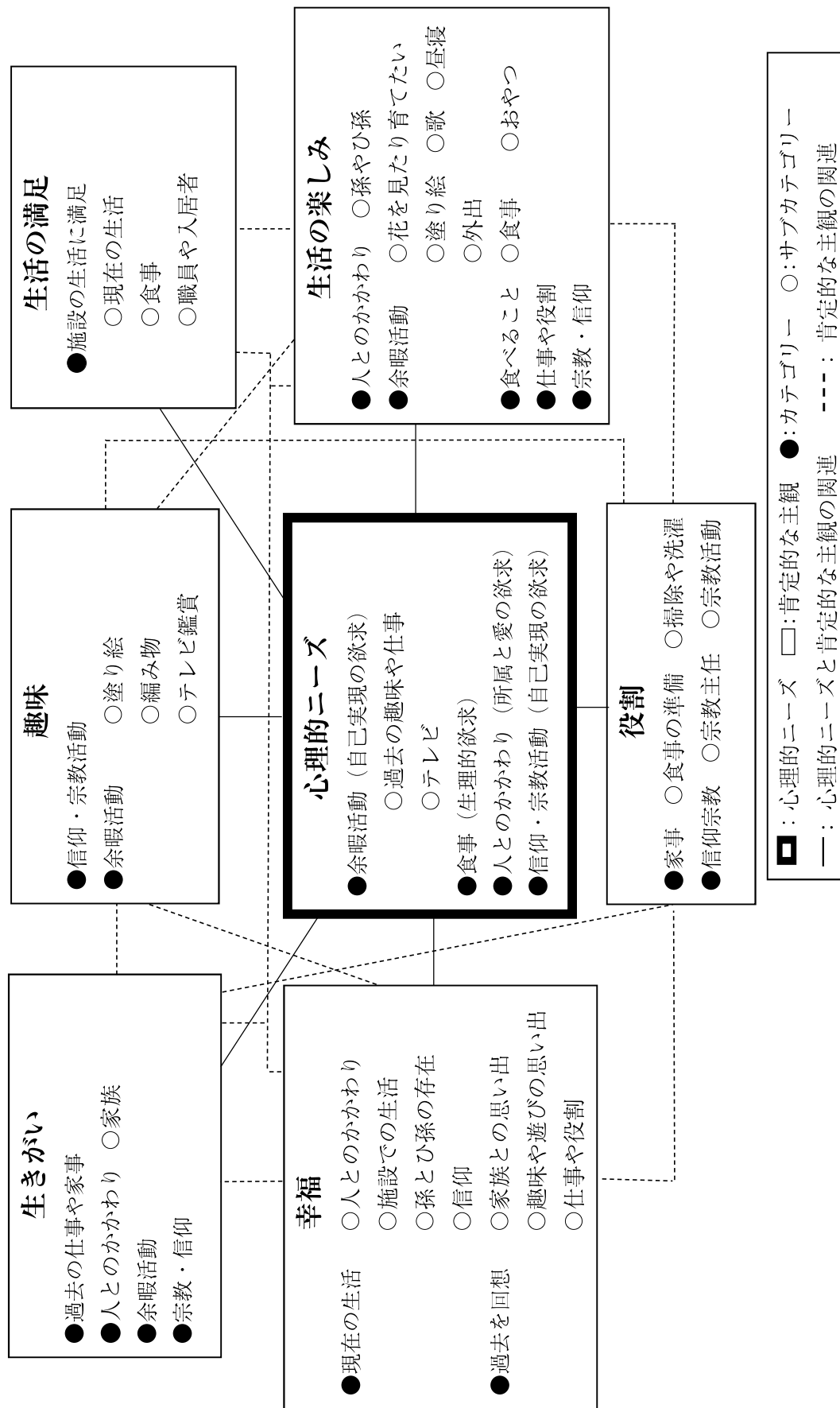


図1 認知症高齢者の心理的ニーズと肯定的な主観の関連

従って礼拝するニーズがある⁹⁾としており、本研究の対象者のニーズ【人とかかわり】【信仰・宗教活動】は看護の基本に合致するものであった。

心理的ニーズの特徴について、マズローの基本的欲求¹⁴⁾と比較した結果、【余暇活動】【信仰・宗教活動】というニーズは自己実現の欲求、【自分のペースで何かをしたい】というニーズは自己実現の欲求、承認の欲求、【人とかかわり】というニーズは所属と愛の欲求に合致すると考えられ、本研究の認知症高齢者は他者と親しくすること、個人の能力や強みを発揮し楽しむこと、充実感を持って生きることが求めていると考えられた。一方、安全と安心の欲求に関するニーズについては、認知症高齢者の心理的ニーズとして抽出されなかった。奥村ら³⁾の研究における介護老人保健施設入所中の認知症高齢者では、安全と安心の欲求に関するニーズが抽出されたが、本研究の対象者はやや認知症が進行していたため、自ら安全を確保するための行動をとることが困難な状態にあり、安全面に注意が向けられていなかった可能性も考えられ、欠乏要求¹⁴⁾として、認知症高齢者には安全と安心を充足するための援助が必要になると考えられた。その一方、本研究の認知症高齢者の主観的健康感【健康・まあ健康】と全員が健康と認識していたことや、8名中7名が【施設の生活に満足している】と語ったことから、安全と安心に関するニーズが満たされ、安全と安心の欲求が表出されなかった可能性も考えられた。これらのことから、グループホームでの生活は認知症高齢者にとって安心感が得られ、落ち着いて生活できる環境にあると考えられた。

本研究の対象者は認知症の重症度が中等度であり、BPSDの出現が対象者1名のみに抑うつがみられていたが、それ以外のBPSDはみられていなかった。BPSDの一つである徘徊は、不安や不穏などが併存し居心地の悪さが出現原因の一つと考えられている^{15, 16)}。グループホームは1つの共同生活住居に5～9人の少人数の認知症高齢者が、施設職員とともに共同生活を送る施設であり⁴⁾、顔馴染みの関係が作りやすいため施設職員のかかわりによってニーズの表出ができていたと思われる。

2. グループホームへ入居中の認知症高齢者の肯定的な主観の特徴

本研究における肯定的な主観とは、「QOLの向上につながる認知症高齢者が前向きになる感情・感覚」と定義し、生活の楽しみ、趣味、生きがい、役割、幸福、生活の満足を肯定的な主観と捉えた。生活の楽しみは【わからない】の1名を除き、【人とかかわり】【余暇活動】【食べること】【仕事や役割】【宗教・信仰】が表出され、趣味、生きがい、幸福の内容が一致あるいは類似していた。さ

らに、役割には【家事に関する役割】【信仰宗教に関する役割】があり、家事や信仰・宗教もまた、生活の楽しみ、趣味、生きがい、幸福の内容と一致していた。したがって、認知症高齢者の肯定的な主観は、生活の楽しみ、趣味、生きがい、役割、幸福と感じる内容が一致していた。

認知症高齢者の生きがいと役割は同一因子と捉えられている¹⁷⁾が、本研究の認知症の当事者による主観的視点からも、生きがいと役割の内容は一致していた。

趣味は【実現困難な趣味がある】【趣味がない】と、趣味があっても実現できていなかったり、趣味が元々ない対象者もいた。3氏は〈趣味はない〉〈役割を持ちたくない〉〈幸せなのかわからない〉と認識し、対象者の中で唯一ネガティブな側面をもっていた。また、BPSDの出現も唯一みられ、抑うつが出現し、肯定的な主観がみられにくい背景であったと考えられた。藤田ら¹⁸⁾によると、アルツハイマー型認知症のうつ傾向にあり、生きがいを感じにくい生活を送っていた90代前半の女性患者に本人のやりたい活動（畑仕事）を通じて介入を行ったところ、意欲的に取り組むようになり、穏やかな表情が増えたとされる。3氏は清掃会社に勤務した経験があることから、掃除に関する役割をもっていたが、〈役割を持ちたくない〉とも感じていた。本人の生活歴から仕事に関する情報を得たとしても、それが本人にとっては、やりたい活動ではないこともあり、本心を引き出し、希望に合った活動を選択できるよう援助が必要である。

3. グループホームへ入居中の認知症高齢者の心理的ニーズと肯定的な主観の関連

認知症高齢者の心理的ニーズと肯定的な主観には関連がみられた。生理的欲求の【食事】は生活の満足と生活の楽しみの【食べること】と一致した。通所系サービスの利用者では、食事を楽しみとしている高齢者にサービスの継続利用の意思が有意にある¹⁹⁾ことが明らかになっている。グループホームの入居者においても、食べることは楽しみの一つであった。また、愛情と所属の欲求と考えられる【人とかかわり】ニーズは、生きがい、生活の楽しみ、幸福、生活の満足と合致した。奥村ら³⁾の介護老人保健施設入所中の認知症高齢者のニーズもまた【人とつながっていたい】であり、同様の結果が得られていた。【余暇活動】は生きがい、趣味、生活の楽しみ、幸福の内容と一致した。

奥村ら³⁾の介護老人保健施設入所中の認知症高齢者のニーズと対比すると、【自分で何かやりたい】という尊厳の欲求、自己実現の欲求に類似したニーズであった。また、【信仰・宗教活動】は、生きがい、趣味、生活の楽しみ、幸福、役割の内容と合致したが、認知症高齢者を対象としたニーズに関する先行研究では、信仰・

宗教活動に関する内容はみられていなかった。宗教は自己実現の基本要素の一つである²⁰⁾とされ、【信仰・宗教活動】のニーズは、高次の欲求であると考えられた。よって、本研究の対象となった認知症高齢者は質の高い生活を送っていることが確認された。

VI. 結語

本研究の対象となった認知症高齢者の心理的ニーズは【余暇活動】【食事】【人とのかかわり】【信仰・宗教活動】【自分のペースで何かをしたい】【やりたいことはない】【明瞭なニーズは示さない】【ニーズの充足を断念する】の8カテゴリーが得られた。肯定的主観では【人とのかかわり】【余暇活動】【信仰・宗教活動】【食べること】【家事】【施設の生活に満足】【仕事や役割】【過去を回想】【過去の仕事や家事】の9カテゴリーが得られた。これらの内容に共通性・類似性が見られることから、心理的ニーズの充足が肯定的感情を引き出しQOLの向上につながる事が予想された。心理的ニーズの把握が困難となった場合には、趣味や生活の楽しみ等を手掛かりとして心理的ニーズの予測が可能と考える。

VII. 研究の限界

本研究は、対象施設が1施設であり、今後は、本研究で得られた示唆を基に、理論的飽和を得るために対象者や施設数を増やし、今回の結果を検証すると共に、認知症高齢者のQOL向上に向けた看護について検討したいと考える。

COI開示：開示すべき利益相反はありません。

謝辞：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染予防対策の中、ご協力頂いた対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省：今後の高齢者人口の見通しについて。
https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-1.pdf（最終閲覧日：2020/11/21.）
- 2) 厚生労働省：認知症施策推進大綱。
<https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf>（最終閲覧日：2021/3/30.）
- 3) 奥村朱美，内田陽子：介護老人保健施設入所中の認知症高齢者のニーズの特徴。老年看護学。13（2）：97-103，2009.
- 4) 厚生労働省：認知症対応型共同生活介護（認知症グループホーム）
<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000647295.pdf>（最終閲覧日：2020/11/21.）
- 5) 加藤伸司：認知症の人の視点から考えるBPSD。老年精神医学雑誌。27（1）：157-163，2016.
- 6) 畑野相子：認知症を有する高齢者が笑顔を取り戻した過程とその支援～自己肯定感に関する表出に着目して～。生きがい研究。25：13-28，2019.
- 7) 中島紀恵子：認知症ケアにおいて当事者の声を聴くことの重要性。日本認知症ケア学会誌。17（2）：377-383，2018.
- 8) 永田久美子：高齢社会における認知症の課題と展望 変化する時代の中での認知症ケアの展開。Geriatric Medicine。54（5）：459-463，2016.
- 9) ヴァージニア・ヘンダーソン著（湯槇ます・小玉香津子訳）：看護論—定義およびその実践 研究 教育との関連 25年後の追記を添えて。42-43。東京：日本看護協会出版会。2017.
- 10) 高橋順子，眞鍋知子：認知症高齢者を介護する配偶者の介護継続意思を支える要因 —配偶者特有の認識—。看護総合科学研究会誌。15（1）：3-15，2013.
- 11) 近藤勉：生きがいを測る 生きがい感てなに？。京都：ナカニシヤ出版。2007.
- 12) 星旦二，中山直子，他：地域活動を展開している全国高齢者における3年後の生存との関連要因。生きがい研究。24：84-97，2018.
- 13) 小長谷陽子，相原喜子，他：認知症における知的機能とコミュニケーション機能—言語性、及び非言語性コミュニケーション情報認知機能に関する研究。平成18年度認知症介護報告書。61-66。2007.
- 14) 廣瀬清人，菱沼典子，他：マズローの基本的欲求の階層図への原典からの新解釈。聖路加看護大学紀要。35：28-36，2009.
- 15) 大津美香，高山成子，他：アルツハイマー病と血管性認知症高齢者にみられる徘徊行動の比較。保健科学研究。2：9-23，2012.
- 16) 大津美香，高山成子，他：認知症高齢者における徘徊対応プロトコルの有用性の検討。保健科学研究。3：85-99，2013.
- 17) 陳麗娜：認知症高齢者ケアにおけるケアアセスメント視点に関する検討。日本認知症ケア学会誌。16（3）：659-669，2017.
- 18) 藤田直樹，土井宣幸：当通所リハビリテーションで本人のやりたい活動を通じて関わった取り組み 生きがいの再獲得に向けて。鳥取県作業療法学会誌。14（1）：73-76，2017.

- 19) 大津美香, 高山成子, 他: 介護保険制度による通所系サービス1年継続利用者のサービス内容に対する満足感と関連する要因についての検討. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌. 7(1): 145-153, 2007.
- 20) 清重哲男: 宗教の超越的視点からの自己実現概念の構築に関する研究—古代インド仏教思想の自己実現

概念—. 日本社会福祉学会 第59回秋季大会. 282-283. 2011.

https://www.jssw.jp/archives/event/conference/2011/59/abstract/pdf/59_141.pdf. (最終閲覧日: 2021/3/11.)

Characteristics of the psychological needs and positive subjectivity of elderly persons with dementia living in group homes

Miwa Miura ¹⁾, Haruka Otsu ²⁾, Kikuchi Yukiko ³⁾, Suzuki Fumiko ⁴⁾ and Hidetaka Narita ²⁾

1) Hirosaki University of Health and Welfare, Department of Nursing, 3-18-1 Sanpinai, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8102 Japan

2) Hirosaki University Graduate School of Health Sciences, 66-1 Hon-cho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8203 Japan

3) Social Welfare Corporation Takuhoukai Hakujuen Ekimaekan, 1-13 Inamoto, Osawa, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8125 Japan

4) Social Welfare Corporation Takuhoukai Group home Hakuju no ie, 152-2 Kishita, Ishikawa, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8124 Japan

Abstract

The purpose of this study was to clarify the characteristics of the psychological needs and positive subjectivities of elderly people with dementia who reside in group homes in order to obtain suggestions as to how they can be helped to live more fulfilling lives. We interviewed eight elderly residents with dementia in one facility, individually and in a semi-structured setting. The results were analyzed qualitatively and inductively. Psychological needs were categorized as “leisure activities,” “meals,” “interacting with others,” “wants to engage in religious / religious activities,” “wants to do things at their own pace,” “has no desire to do anything,” “does not exhibit any clear needs” and “have given up having their needs met.” As for positive subjectivities such as enjoyment of life, hobbies, and satisfaction with life, categories that included “interacting with others,” “leisure activities,” “faith / religious activities,” “eating,” “housework,” “satisfaction with life in the facility,” “work and work roles,” “recollecting the past,” and “past work and housework” were obtained. The results were common to and similar for each of the respondents. In addition, there were similarities in their psychological needs and levels of positive subjective contentment. In the “meals” category, similarities with the content of satisfaction with life and enjoyment of life were found. “Interacting with others” matched up with purpose of life, enjoyment of life, happiness, and satisfaction with life, “leisure activities” with purpose of life, hobbies, enjoyment of life, and happiness, and “engagement in religious / religious activities” with purpose of life, hobbies, enjoyment of life, happiness, and work roles. From these findings, it was thought that the fulfillment of the psychological needs of residents in homes for the elderly with dementia can draw out positive emotions and that it would be possible to predict their needs by utilizing enjoyment of life and hobbies and other factors as clues.

Keywords: Elderly persons with dementia, Psychological needs, Positive subjectivity, Group home for elderly residents with dementia